様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ９ 月　 ８ 日現在

機関番号：３３１０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２３７８

研究課題名（和文）『万葉代匠記』の歴史的意義と思想的背景について

研究課題名（英文）Reseach on the historical impact and the background of Keichu's "Manyo-daishoki"

研究代表者
西澤　一光（Nishizawa, Kazumitsu）

新潟経営大学・経営情報学部・准教授

研究者番号：３０２４８８８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、Ａ『代匠記』の冒頭の「惣釈」および巻一・巻二の注釈をいくつかの初稿本の写本を比較しながら読解し、精撰本と比較することによって、さらに、契沖以後の学者の契沖評価を整理することにより、（１）契沖の読解方法が「解釈学」と呼べるような方法であって、中世期までの注釈とは根本的に異なって、語句の解釈が時代の言語体系および作品全体のなかで二重に決定されるものであるという「知」であることを明らかにした。さらに、（２）契沖の「解釈学」が高野山の漢学の方法とその学問の契沖独自の受容とによって形成されたものであることを明らかにした。（３）研究結果をウェブサイトで一般に共有する作業を継続的に展開している。

研究成果の学術的意義や社会的意義
今日『万葉集』が読めるようになっているのは契沖の仕事のおかげである。今も多くの注釈書や研究論文が契沖の『代匠記』を引用している。契沖以前にも700年以上にわたる『万葉集』研究の歴史があるが、それらには歌を作品として「解釈」する視点が欠けている。契沖は独力で解釈学の体系を構築し、古代の作品は古代の言語体系で書かれていること、『万葉集』の文字表現は漢籍の織物であることを踏まえて、言語と思想の状況に立って『万葉集』を読解したのである。ところが、今日でもなお契沖の『代匠記』は専門家によって「注釈」としか見られていない。本研究は『万葉代匠記』に一貫している読解の思想と方法の解明に取り組んだものである。

研究成果の概要（英文）：Through the comparison of the several manuscripts of "Manyo-Daishoki" of Keichu and the complete version dedicated to Mito Mitsukuni, and under the lights of history of the researches of Keichu, we clarified the essence of the method of the commentary of "Manyo-shu" as a kind of the "Hermeneutics", which is fundamentally different from the commentaries made until medieval era. Keichu was keenly and methodologically conscious of the "savoir"(a famous technical term of Michael Foucault) of the period of "Manyo-shu", and determines the meanings of words and phrases from the diachronic and synchronic reseaches. Beside that, we have known that the " Hermeneutics"of Keichu had been constructed and established under the influence of the tradition of Chinese knowledge in the temples in the mountain of Koya. Now we are making our results of the research open to the public by uploading essays online.

研究分野：日本文学

キーワード：『万葉集』　『万葉代匠記』　契沖　思想史　解釈学　漢籍　高野山の学問　本居宣長

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

研究成果報告ファイル

１．研究開始当初の背景

17 世紀末に成立した『万葉代匠記』は今日でも参照される『万葉集』の注釈書であるが、この書物を全体として成り立たせているものは何かと問う時、言い換えれば、テキスト論ならびに解釈学的な視点から見た時、この書は『万葉集』を書いた古代言語が同時代の漢籍語で書かれているという視点を初めて提示した点に歴史的な意義をもつのであり、その方法的、思想的基盤を承ける形で 20 世紀の澤瀉久孝による『万葉集注釈』が生成し、さらに小島憲之による出典研究が出てくるのだが、契沖がそうした視点をいかに獲得していったのかが問題として考察されることがなかったところに本研究が成り立つ意義があると考えられた。

「古代言語が同時代の漢籍語で書かれた」テキストであるという認識を契沖が次第に明確にしていったのは、契沖が『万葉代匠記』を改稿していくプロセスだったというところまでは、それ以前の研究論文で見通しをつけて置いたので、『代匠記』の「初稿本」と「精撰本」の比較が重要であるという視点が予め得られていた。

従来の学会では「初稿本」のみが『万葉代匠記』として流布していたという事実さえ明確には踏まえられておらず、また、「初稿本」と「精撰本」について考察した先学・久松潜一も十分な理解を示していたとは言えないと考えられる。

２．研究の目的

8 世紀に成立した『万葉集』というテキストが 17 世紀になってようやく「古代言語が同時代の漢籍語で書かれた」テキストであるという認識のもとに読解されるようになったということそのものの意義を日本の思想史上に再定義し（『万葉代匠記』の歴史的意義の再定義）、かつ、そのような認識を可能にし

た歴史的条件とは何かを明らかにすること（『万葉の思想史的背景』が本研究の目的である。

20 世紀の後半以降、フランス現代思想の影響で日本でも構造主義やテキスト論がブームとなったが、いまだに「構造主義」についても、「テキスト論」についてもパラダイムと呼ぶべき共通の知的了解はできていない。90 年代以降、構造主義ブーム、テキスト論ブームが挫折し、『万葉集』については漢籍出典をただひたすらに指摘するという「読み」のない研究が新たなブームとなった。

いずれのブームにおいても現代人が古代のテキストを読むという「解釈」の営みを自覚することが欠如していた。遥か古代のテキストの読解がいかに可能になるのかという問題意識から西欧では「解釈学」が生成したが、そういう問題意識が「テキスト論」にも、漢籍出典論にも希薄であったと言える。

ところが、契沖の『万葉代匠記』というテキストは、まさにこの問題意識の上に全体が構築されているのであり、そのことはすでに本居宣長によって気づかれていたのである。

したがって、本研究では、契沖から本居宣長に至る研究の系譜を日本における「解釈学」の定礎として捉え直す視点から、契沖の『万葉代匠記』をその全体性において、言い換えれば、その思想性を読み出すことを目的とするものとして立ち上がっている。

３．研究の方法

『万葉代匠記』の歴史的意義の明確化とその思想的な背景の前景化のために本研究が掲げた方法は、『万葉集』の中世的な解釈に対する契沖の解釈の特徴の明確化であった。『万葉集』は＜「古代言語が同時代の漢籍語で書かれた」テキストであるという認識＞が失われた平安朝以後室町に至るまで完全には読むことのできないテキストであり続け、仮名で書き直されることによってのみ読まれてきたのであったが、そかも、それは「中世的な解釈」によって享受されていた。

これに対して契沖が行った解釈学的な革新の本質は、テキストを漢字文字列のままに捉え、かつ、古代言語によって書かれたテキストとして捉え直したところにあり、それは契沖の解釈者としての思想で

あると同時に方法であって、それが明確に解釈学上の問題として捉えられていたゆえに『万葉代匠記』という全体が成り立ったと言えることは、上に述べた通りである。

ところで、「中世的な解釈」が一子相伝的な神秘化によって権威を保ってきていたのに対して、契沖がなしえたのは「読む」こと、言い換えれば、「解釈」することの地平を切り開いて、歌学の権威を破壊したことであったが、この「解釈」の地平の構築は『万葉代匠記』の全体の方法を述べた「惣釈」および『万葉集』の全歌の注釈によって示されている。特に契沖の解釈学を明確に示している「惣釈」の叙述は『万葉代匠記』の草稿本から始まって、水戸家に献上された「初稿本」、さらにその後に献上された「精撰本」へと進化している。

まさに、契沖の「解釈学」の思想と方法は、『代匠記』を書き、改稿しながら明確化されていったのであり、本研究は、草稿本の性格や、その上に成り立った「初稿本」の系統を整理しながら、「精撰本」への展開を比較検討することにより、研究目的の達成を目指した。

また、『万葉代匠記』の歴史的意義の再定義については、中世的な解釈からの切断面に注目するのみならず、江戸期から明治・大正期にかけての契沖研究を整理することによって導きの意図を得ることにした。

４．研究成果

本研究が研究期間内に明らかにし得た知見は以下の５本の柱によって総括することができる。

（１）『万葉代匠記』の「初稿本」から「精撰本」への展開について問題系。

（２）契沖の解釈学的方法の確立についての問題系。

（３）契沖と高野山の学問の関連についての問題系（上記（２）に付随する問題系）。

（４）創作和歌から見た契沖思想についての問題系（上記（２）に付随する問題系）。

（５）『万葉代匠記』の歴史的意義についての問題系。

以下に、各項目についての業績と概要を記す。

（1）『万葉代匠記』の「初稿本」から「精撰本」への展開について問題系。

1）研究発表「契沖研究のための基礎的考察１＝契沖を捉える視座＝」、西澤一光、2017 年 1 月 28 日、上代文学研究会、東京大学駒場キャンパス 14 号館６階、2 時～6 時。2）研究発表「契沖『万葉代匠記』の成立をめぐって（２)」、西澤一光、2017 年 6 月 10 日、上代文学研究会、東京大学駒場キャンパス 14 号館 6 階、2 時~ 6 時。

（2）契沖の解釈学的方法の確立についての問題系。

1）研究発表「17 世紀における契沖解釈学の確立の意義をめぐって（第一部)」、西澤一光、2018 年 3 月 16 日、第 3 回日仏翻訳学研究会、京都工芸繊維大学 60 周年記念館 2 階セミナー室。2）「ハイデガーと契沖における『生きた世界』としての文学の創造的な解釈」、西澤一光、2018 年 11 月 15 日、第 4 回日仏翻訳学研究会準備会、京都工芸繊維大学・工繊会館。3）研究発表「17 世紀における契沖解釈学の確立の意義をめぐって（第二部)」、西澤一光、2019 年 3 月 15 日、第 4 回日仏翻訳学研究会、京都工芸繊維大学・工繊会館。1）および３）は、近時、日本語版ならびにフランス語版が、京都工芸繊維大学教授・ジュリー・ブロック氏の監修で公刊される予定である。

（3）契沖と高野山の学問の関連についての問題系（上記（2）に付随する問題系)。

1）研究発表「契沖の高野山時代の学問と解釈学との関連について」、西澤一光、2018 年 12 月 16 日、第 1 回契沖研究会、スペイシー・レンタルスペース、午後 1 時 15 分から午後 4 時 15 分。

（4）創作和歌から見た契沖思想についての問題系（上記（2）に付随する問題系)。

1）論文「契沖の和歌 ：『詠富士山百首和歌』をめぐって」、石田千尋、中央大学文学部紀要第 274 巻、2019 年、pp.85-115。同原稿は、前だって上記「第 1 回契沖研究会」で口頭発表。

（5）『万葉代匠記』の歴史的意義についての問題系。

インターネット上のサイト「『万葉代匠記』の歴史的意義と思想史的背景について」２２本の記事を公開した。

以上、2020 年 9 月 8 日、西澤一光記。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 石田千尋	４．巻 274
２．論文標題 契沖の和歌 ：『詠富士山百首和歌』をめぐって	５．発行年 2019年
３．雑誌名 中央大学文学部紀要	６．最初と最後の頁 p.85-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　1件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 西澤一光
２．発表標題 「ハイデガーと契沖における「生きた世界」としての文学の創造的な解釈」
３．学会等名 フランス翻訳学会(SoFT)「日仏翻訳学研究」第4回研究会準備会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 西澤一光
２．発表標題 「17世紀における契沖解釈学の確立の意義をめぐって（第二部）」
３．学会等名 フランス翻訳学会(SoFT)「日仏翻訳学研究」第4回研究会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 西澤一光
２．発表標題 「契沖の高野山時代の学問と解釈学との関連について」
３．学会等名 第1回契沖研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 石田千尋
２．発表標題 「契沖の和歌―『詠富士山百首和歌』をめぐって―」
３．学会等名 第1回契沖研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 西澤一光
２．発表標題 契沖『万葉代匠記』の成立をめぐって（2）
３．学会等名 上代文学研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 西澤一光
２．発表標題 「契沖研究のための基礎的考察１＝契沖を捉える視座＝」
３．学会等名 上代文学研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 西澤一光
２．発表標題 「17世紀における契沖解釈学の確立の意義をめぐって（第一部）」
３．学会等名 フランス翻訳学会(SoFT)「日仏翻訳学研究」第3回研究会（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	石田　千尋 (Ishida Chihiro)	山梨英和大学・人間文化学部・教授 (33503)	
研究協力者	関　隆司 (Seki Takashi)	高岡市万葉歴史館・主任学芸員	